

Card Magic Magazine



No. 9

January 6, 2013

by Hideo Kato

Thirty Card Mystries

= 第 7 回 =

第 4 章 準備の必要なトリック

この章に解説するトリックは、いままで解説してきたほとんどのトリックのように即席的にできるものではありませんが、どれも実用的で不思議さの強いものです。パーラーマジックとかクロスアップマジックとして演じるのに最適です。最初に解説するのは、もうひとつのモレン氏の得意技です。

24. メッセージフロムマー

= Message from Mar =

* 現 象 *

マジシャンは火星から届いたばかりの手紙だと言って、封筒を見せて、上着の右内ポケットに入れます。借りたデッキをシャフルして、その中から2から6までのカードをすべて取り除きます。そのピケットデッキを客が2組のパイルにディールして、どちらかの組のトップカードを見ておぼえます。右内ポケットから封筒を出して、中の予言を読むと、選ばれたカードと一致します。

* 準 備 *

準備として、2つの封筒のそれぞれに、異なるピケットカードの名前を書いた紙片を入れておきます。2つの封筒をチョッキの右ポケットに入れておきます。

* 方 法 *

最初に封とを取り出しますが、少し左向きになり、右手で右襟をつかんで持ち上げ、いかにも右内ポケットから出す振りをして、チョッキから1つの封筒をチリ出します。それに予言の紙片が入っていることを説明してから、それを右内ポケットに戻す振りをして、チョッキのポケットに入れます。

デッキを借ります。シャフルしてから2から6までのカードを取り除きますが、予言されている2枚のカードを探します。そのうちの1枚が見つかったら、さらに2から6までのカードを除きながら、最初の予言カードのあと、何枚目に2枚目の予言カードが出てくるかを数えます。2枚目の予言カードが出てきたら、その下でカードを分けて、右手のカードを表向きにテーブルに置き、左手に残っているカードで2から6までの取り除き作業を続け、残りのカードをテーブルのカードの上に重ねます。

分けた2から6以外のピケットカードを取り上げ、裏向きにして、まず先ほど数えた数だけ1つの組にディールします。それからその上に残りのカードをディールします。そうすると、2枚の予言されたカードはデッキのボトムに位置します。(訳注: 正確に訳したつもりですが、この通りにやったのでは1枚しかボトムに位置しません)。

それから客にデッキを渡して、2組にディールさせます。そうすると、2枚の予言カードがそれぞれの組のトップカードとなります。客に好きな方を選ばせ、どちらが選ばれたかによって、そのカードが書かれてる紙片の入った封筒をチョッキのポケットから取りだして、予言が3当たっていることを示します。上着の右ポケットを調べさせてもかまいません。

* 訳 注 *

このようにデッキの中から何枚かのカードを取る操作のときこそ、特定のカードをカルするのが自然に行えます。目的のカードを送っていくカードの下に抜き出して、カードを閉じるときにバックにすべり込ませればよいのです。

そうすると予言された2枚はトップにきますから、そのあとダブルディールの手法を使うことができます。すなわち、客に1組の山に好きなだけディールしてストップさせ、ディールしたカードをさらに2組にディールさせれば、予言カードはそれぞれのトップカードとなります。

ジョーダンのトリックには、重要なものが多くあるとともに、販売商品を増やそうと多く書いたため、実用的でないものが含まれがちになったと思います。このトリックがよい例です。他にもノーマルデッキから小さい数のカードを除いてピケットデッキとして演ずるものがありますが、たとえピケットデッキがよく知られたその当時であっても、本当にそのようなことをやったのでしょうか。少なくとも現代の私たちは、絶対にやらないでしょう。

かといってこのトリックの構造が、現代に通用しないということではないと思います。前述したダブルディールを使う手法は、ダローの'アンタッチド'というトリックに使われていて、しかもそのトリックは現代のマジシャンに愛用されています。

ちなみにダローのそのトリックは、ほとんどアル・リーチの'The Spectator Does a Trick'と同等です。若干カードのディールの仕方とプレゼンテーションが違うだけで、不思議を生み出す構造は同等です。ダローの作品としてクレジットされていますが、リーチの作品の存在はいままで指摘されてきませんでした。むしろ私は、原案者はリーチであり、ダローの作品はそのバリエーションであると考えたいと思っています。

構造的にジョーダンのこのトリックは、ダブルディールこそ使ってはいませんが、デッキを2組にディールすると、2組のトップにフォースカードがくるという点で、リーチ作品に無関係ではありません。このように、ジョーダンはどこかで現代作品とつながっているものが多いのです。

25. コルリア

= Coluria =

* 現 象 *

デッキをシャフルしたあと、2から6までのカードが取り除いて、ピケットデッキとします。客がデッキを何回かカットしたあと、裏向きに6つのパイルにディールします。手に残った2枚のカードをポケットに隠します。そのあと、客は両方のポケットのトップカードの、色だけをマジシャンに教えます。マジシャンはそれをもとに、6つのパイルのボトムカードを当て、そしてポケットに隠された2枚を当てます。

* 準 備 *

デッキ全体を準備しておくということは、たいていのマジシャンにとって新しいことだと思います。このトリックでは、カードの色が鍵となります。デッキの中のピケットカードの部分は、トップからボトムに向かってつぎのようにセットします。

b b b b b b r b b b b r r b b b r r r b b
AS KC QC 10S 7C JS 7H QS 9S AC 8C 10H AD JC 8S 9C 9H 8D KH 10C KS

r r r r b r r r r r r.
QH 9D AH JD 7S QD JH 7D 10D 8H KD.

このようにセットした32枚をカットしてから、その上に2から6までのカードを重ねますが、ブリッジすることによって分けられるようにしておきます。

そして上記の順番を何列かに分けて紙片に書いて、紙片を胸ポケットに隠しておきます。

* 方 法 *

デッキを境目で分け、2から6までのカードとピケットカードとをリフルシャフルして、そしてデッキをカットします。それから2から6までのカードを取り除きます。ピケットのポケットを客に持たせ、マジシャンは後向きになります。以下の客への指示を行っている途中で、密かにポケットからカードの配列を書いた紙片を取り出しておきます。もちろん、その動作が目立たないようにやってください。

客にポケットを何回かカットさせてから、6つの組にディールさせ、手に残った2枚をポケットに隠してもらいます。

客に左のパイルから右向かって、それぞれのトップカードを表向きにして、表向きにしたカードの色だけを言わせませう。6枚の色の並び方と、紙片に書かれた色の並び方を照合すると、どのカー

ドからの 6 枚であるかがわかります。なお、紙片に書かれた数の並びは、最後のカードが最初のカードにつながっていると考えます。

いま特定した 6 枚のつぎの 2 枚がポケットに隠された 2 枚であり、そのあとの 6 枚が左から右に向かってポケットのボトムカードですから、適切な演技でそれらを当てていきます。最後にポケットの中のカードを当てます。

* 訳 注 *

このトリックの原理を発展させた作品が、“Card Magic Library” 第 4 巻、163 ページに解説された、マーチン・ガードナーの‘陰陽’です。同巻には、同じ原理を用いたジョーダンの異なるバージョンも解説されています。

26. サンタズトランス

= Satan's Trance =

このトリックについては、私（加藤）が翻訳している原著デジタル版に不備があり、正確に判断できない部分がありますので、加藤の推測を交えて加藤が書きます。

* 現 象 *

4 人の客のそれぞれに封筒が渡されます。ここでマジシャンは後向きになります。1 人の客がデッキを何回かカットして、トップから順に右から左の客に渡していきます。マジシャンは残りのカードを背後に受け取ります。それぞれの客がカードを封筒に封印し、4 つの封筒は混ぜてからテーブルに置かれます。

ここで部屋の明かりが消されます。しばらくすると、何やら封筒に文字を書く音がします。明かりがつけられます。それぞれの封筒の表に書かれたカードの名前と、中のカードが一致します。

* 準 備 *

ふつうのデッキから 2 から 6 までのカードを除外してピケットデッキとします。ジョーダンは、最初からピケットデッキを使う方がよいと述べています。

次ページのカードのセットのうち、太字のものがラフ加工すると説明されていますが、デジタル版では太字が反映されていないので、セットの仕方がわかりません。

ジョーダンは、ラフ加工が 1 枚だけの部分と、2 枚連続する部分と、3 枚連続する部分と、

4 枚連続する部分があると書いているので、何枚続いているかによって、セットのうちのどの部分かを触覚でわかるということを利用しています。

AS=9H=QC=7D=10S=KH=8C=JD=AH=9C=QD=7S=10H=KC=8D=JS=
AC=9D=QS=7H=10C=KD=8S=JH=AD=9S=QH=7C=10D=KS=8H=JC=

またジョーダンとは、上記のカードの並びのことを、ピケットデッキによるサイ・ステビンススタックだと述べていますが、マークの順がどのような法則か理解できません。

とりあえず通常のサイ・ステビンススタックを使うものとして説明します。トップがダイヤのAであるとすれば、トップから 14 枚目はクラブのA、27 枚目はハートのA、40 枚目はスペードのAとなります。

すべてのAの表面をラフ加工します。そしてクラブのAについては、それに続く 1 枚も表面をラフ加工します。ハートのAについては、それに続く 2 枚のカードの表面にラフ加工します。スペードのAについては、それに続く 3 枚のカードの表面にラフ加工します。

そのようにセットしたスタックは、暗闇でトップからカードを送ったとき、最初に指先に触れたラフ加工のカードのあとに何枚のラフ加工のカードがあるかによって、それがどのAであるかわかります。そこまで枚数をカウントしておくことによって、トップカードが何のカードであるか逆算でき、したがって、取られた 4 枚がなんであるかがわかります。

客に渡す封筒には、フラップを触ると識別できる印を、針の先でつけておきます。

*** 方 法 ***

どの封筒がどの客に渡されたかを記憶しておきます。現象説明のように進め、明かりが消されたら、前述のように取られた 4 枚を認知します。

封筒を取り、マークによってどの客の封筒か認知し、しかるべきカードの名前を書きます。そして現象説明の通りに進めます。

*** 備 考 ***

ジョーダンの説明通りに演じる気になる方は少ないと思いますが、触覚でカードの位置を認知するアイデアは応用できると思います。相手がカットしたデッキを背後で受け取り、背後で広げていき、相手がストップをかけたところのカードを取らせませす。取られたときにそれが何であるかわかります。

27. チェンジユアマインド？

= Change Your Mind? =

* 現 象 *

マジシャンはデッキを何回かシャフルしてから、数組にディールして分けます。それらのパケットを客が好きな順で重ねて集めます。それからカットして、そしてトップから2枚のカードをテーブルに置き、それらの2枚のカードの表を見て、好きな方を客の選んだカードと決めます。2枚をデッキの上に返し、デッキをカットしてから、2組にディールします。

それから客が選んだカードが入っている方のパケットを取り、よくシャフルしたあと、カードを裏向きとか表向きに、テーブル上にでたらめに分散させます。マジシャンはそれらのカードの上に手をかざして、裏向きと表向きで混ざっているカードを探ってから、1枚のカードを取り上げます。それが客の選んだカードなのです。

半分のパケットが残っていますから、使った方のパケットは捨てて、残りの半分を使って、もういちど同じこと演じることができます。

* 準 備 *

スチームボート製のデッキを使います。裏面が青い星模様のもので、つぎのような模様です。

```
*****  
*****  
*****  
*****  
*****  
*****  
*****  
*****  
*****  
*****  
*****  
*****  
*****  
*****  
*****
```

このデッキをつぎの4組に分けます。

1. AH,3H,5H,7H; 2D,4D,6D; 9S,JS,KS; 8C,10C,QC
2. AD,3D,5D,7D; 2H,4H,6H; 9C,JC,KC; 8S,10S,QS
3. AS,3S,5S,7S; 2C,4C,6C; 9H,JH,KH; 8D,10D,QD
4. AC,3C,5C,7C; 2S,4S,6S; 9D,JD,KD; 8H,10H,QH

他の組と混ぜないかぎり、それぞれの組のカードはシャフルしてかまいません。青インクのペンを使って、グループ1の中の黒いカードの左上と右下の4個の星印の中央にドットマークをつけて、赤いカードと区別できるようにします。グループ3の黒いカードについても同様のマークをつけます。ただしグループ3のカードは、裏面中央にもドットマークをつけます。グループ2のカードにはマー

クはつけません。そしてグループ 4 のカードには、中央にだけマークをつけます。そのあと、それぞれの組から順番に 1 枚ずつ取って重ねていきます。

* 方 法 *

最初にデッキをフォールスシャフルします。いくつかの山にディールして、それらをランダムに集めてもかまいません。ただし、ひとつの山には必ず 4 の倍数枚をディールします。そうすれば、4 つのグループのカードの循環配列はくずれることはありません。

客にデッキを渡し、何回かカットさせたあと、トップから 2 枚のカードをテーブルに置かせます。2 枚をのぞいて見たあと、好きな方を選ばれたカードとさせます。そして 2 枚をデッキのトップに戻させますが、先に置いた方を先に戻させます。すなわち、トップの 2 枚が入れ替わるようにするのです。

それからデッキをカットさせ、そして 2 組にディールさせると、一方の組はグループ 1 とグループ 3 のカードですが、1 枚だけ違うグループのカードが入っています。他方の組はグループ 2 とグループ 4 のカードですが、1 枚だけ違うグループのカードが入っています。したがって、客が 2 枚のうちどちらを選択しようとも、どちらも見つけることができるのです。

選ばれたカードがどちらの組に入っているかを客に確認させ、そのパケットのカードを裏向きや表向きでバラバラにテーブル上に分散させます。

選ばれたカードの見つけ方は簡単です。裏向きのカードについては、グループ 1 と 3 に入っている選ばれたカードは、コーナーのドットがそのカードだけありません。グループ 2 と 4 の中に入っている選ばれたカードは、それだけコーナーのドットがあるカードです。

表向きのカードについては、グループ 1 と 3 は奇数のスペードとハートおよび偶数のクラブとダイヤで、グループ 2 と 4 はその反対ですから、異なるグループのカードを見つけることができます。

残りのパケットで繰り返し演じる場合は、最初に演じたときに、客がテーブルに 2 枚置いたうち、使わなかった方のカードについて無視します。そうすれば残りのカードは 2 つのグループのカードが交互になっていますから、2 つのパケットにディールしたとき、選ばれたカード 2 枚がそれぞれ反対のグループに入ることになります。

* 訳 注 *

通常デバインドスタックは、赤と黒、奇数偶数、ワンウェイデッキで方向違いにして分けたものなど、2 つのグループに分かれているものですが、このトリックでは 4 つのグループを 1 回目で 2 つに分けて選ばれたカードを判別し、分かれたカードをさらに 2 つのグループに分けて 2 回目で選ばれたカードを判別するのに使っています。現代でも見られない巧妙な原理だと感心させられます。

しかしながら、いくら原理が巧妙だとしても、しょせんマークを使うのですから、マークドデックを使えばもっと簡単に当てることができます。裏から見てマークと数がわかるマークドデックが存在していなかった時代ならば、このトリックの存在価値があったかもしれませんが、その機能を持ったマークドデックはすでに 1913 年に、デランドのマークドストリッパーデックが売り出されています。

ですからこのトリックは上記のやり方のままでは、今日では演じる価値がないと思いますが、ひとつの点だけ修正演じ方を変えれば、通常のマークドデックでは実現できない不思議さを生み出すことができます。それは客がカードを扱うところをマジシャンが見ないで進めるというやり方です。

そのことはじつは、その後現れるアンネマンの 'アルタネイトディテクション' で、取り入れられているのです。そのことを把握していただくために、アンネマンのその作品をお読みください。そのあとまた、このジョーダン作品について話を続けます。

アルタネイトディテクション

= セオドア・アンネマン、"シー、イツアシークレット"、1934 年 =

* 方 法 *

裏模様のワンウェイデックを、向きの交互セットにしておきます。デックを何回かカットしたあと左手にのせて、1 人目の客にさし出し、あなたは顔を横に向けます。適当なところからカットさせ、下半分のトップカードを取らせ、それをおぼえさせます。

つぎのカードを 2 人目のカードを取らせておぼえさせます。1 人目の客のカードを左手のポケットのトップに返させ、その上に 2 人目の客のカードを返させたあと、1 人目の客が持ち上げたポケットを左手のポケットの上に重ねさせます。(ここまで選ばれたカードの裏面を見てないことが、ジョーダン作品にない重要な要素です)。

顔を前に向けます。デックを 3 人目の客に渡し、トップから表向きに 2 つのパイルに交互にディールさせます。2 人の客には、自分のカードがどちらにいくかチェックさせます。あなたはやはり顔を横に向けています。

1 人目のカードがある方のポケットを取り上げさせ、シャフルさせたのちに受け取ります。裏向きにカードをディールしていき、裏模様の逆向きのカードをディールしたところでストップします。相手のカードを名乗らせてから、最後にディールされたカードを表向きにします。もうひとつのポケットでも同様にして、2 人目のカードを当てます。

* 備 考 *

相手がカードをおぼえているとき、マジシャンがカードを見ないことを、アンネマンが採用していることは重要ですが、この作品はあきらかにジョーダン作品のバリエーションだと考えることができます。アンネマンがジョーダン作品を知っていたかどうかはわかりません。

さらに時は現代まで進み、ジョーダン作品がタマリッツの ' ニーザープラインドノアシリー ' につながっているのを "Card Magic Library 第 1 巻 " で確認していただけます。

さてここで、アンネマンの ' アルタネイトディテクション ' のように、客が選んだ 2 枚のカードをマジシャンが見ないということを、ジョーダンの ' チェンジユアマインド？ ' に採用することを考えてみましょう。

裏表をメチャメチャに混ぜた状態で当てる、というのが私には魅力を感じます。アンネマン作品のように、裏向きでディールしていった、ストップしたところで表向きにして当てる、というストレートな現象よりも、その方が不可能性は強まり、面白さも増すと思います。

ところがそもそもジョーダンのやり方には、裏向きのカードも表向きのカードも素速く判別するのを難しくする要素があります。それは 4 つのグループに分けていることです。残りの半分でもういちど演じるというのを省くことにすれば、2 つのグループに分ければよいことになります。裏模様はコーナーにドットがあるかないか。表に関しては、スペードとハートの奇数とクラブとダイヤの奇数のグループと、他方はその反対のグループとすればよいのです。

カードマジックの歴史を学ぶということは、たんに歴史の知的な面白さを楽しむだけではなく、類似したカードマジックを比較検討し、色々な要素の組合せ方を組み合わせることによって、より高度なトリックに磨き上げたり、新しい面白さを生み出すことにつながられるのです。

28. スペリングエニイカードコールドフォー

* Spelling Any Card Called For =

* 現 象 *

マジシャンはデッキをシャフルしてから、客に好きなカードを 1 枚言わせませす。マジシャンは即座にそのカードのスペルに合わせて、トップからボトムへカードをまわします。最後のスペルを言ったときに持たれたカードが、客の指定したカードなのです。

* 準 備 *

デッキの中に 2 枚のスペードの J と 2 枚のジョーカーが必要です。デッキを以下の通りスタックしますが、下線つきのものをロングカードとします。(訳注：ロングカードを作ることはできませんから、他のカードを全部エンドショートとします)。

JC JS JS JH Joker JD joker 10H KH 3H 6H 9H QH 2H 5H 8H AH 4H 7H 10S
KS 3S 6S 9S QS 2S 5S 8S AS 4S 7S 10C KC 3C 10D KD 3D 6C 9C QC 6D 9D
QD 2C 5C 8C 2D 5D 8D AC 4C 7C AD 4D 7D.

この配列の中で、Jを除く数のカードについては、以下のように、同じマークでスペル数3文字、4文字、5文字のカードが連続しています。スペル数では1文字ずつ大きくなっていますが、数では3ずつ大きくなっています。

ACE FOUR SEVEN
TWO FIVE EIGHT
SIX NINE QUEEN
TEN KING THREE

* 方 法 *

最初に行うシャフルはフォールスシャフルです。そのあとデッキをディーリングポジションに持ち、右手を上からかけます。客に好きなカードを言わせたら、そのカードによって右親指でカードを落としていきますが、つぎのように心の中で言いながら落としていきます。

なお、ある枚数目のロングカードを落とすと書かれていたら、そのロングカードの上にあるノーマルカードはすべて自動的に落ちるので、つぎのロングカードの下で止めるということです。

ボトムのロングカードを落とし、心の中で「ハートの10、K、3」と唱えます。

ボトムから2枚目のロングカードを落とし、「ハートのJ、ダイヤのJ」と唱えます。

ボトムから3枚目のロングカードを落とし、「クラブのJ、スペードのJ」と唱えます。

ボトムから4枚目のロングカードを落とし、「クラブとダイヤのA、4、7」と唱えます。

ボトムから5枚目のロングカードを落とし、「クラブとダイヤの2、5、8」と唱えます。

ボトムから6枚目のロングカードを落とし、「クラブとダイヤの6、9、Q」と唱えます。

ボトムから7枚目のロングカードを落とし、「クラブとダイヤの10、K、3」と唱えます。

ボトムから8枚目のロングカードを落とし、「スペードのA、4、7」と唱えます。

ボトムから9枚目のロングカードを落とし、「スペードの2、5、8」と唱えます。

ボトムから 10 枚目のロングカードを落とし、「スペードの 6、9、Q」と唱えます。

ボトムから 11 枚目のロングカードを落として、「スペードの 10、K、3」と唱えます。

ボトムから 12 枚目のロングカードを落として、「ハートの A、4、7」と唱えます。

ボトムから 13 枚目のロングカードを落として、「ハートの 2、5、8」と唱えます。

以下のように唱えながらロングカードを落として、唱えた中に客の指定したカードがあったらストップし、そこにブレイクを作り、そしてそのブレイクからパスを行います。

ハートの 6、9、Q、そしてジョーカーの場合は、そのまま何もしません。

以上で指定されたカードのスペルを、「A C E O F H E A R T S」のように、複数の「S」つきでスペルしながらディールすると、最後に指定されたカードが現れます。

何枚目のロングカードを落とすかは、前述の説明をよく見ると、部分部分で法則がありますので、その法則を把握すれば、記憶することが簡単になります。

* 訳 注 *

このトリックの解説を読むと、色々な考えが浮かびます。スペルを使って指定されたカードを現すという現象が、日本の観客に受けそうもないことが最初に感じられます。その考えによって、このトリックを無視してしまうというのは、カードマジックの歴史を学ぶ態度としては望ましくないと思います。

クリエイターの執念

私が強烈に感じたことは、デッキの 1カ所でカットもしくはパスしただけで、どのカードでもスペルで現せるような構造を構築した執念です。執念を賞賛してもしようがない、と感じる方もいるかもしれません。そのように感じる方もまた、カードマジック研究家としての資質に、失礼ながら疑問を持たざるを得ません。何事も極める上で欠かせないのが、目的を達成するという執念に他ならないからです。

ロングカード

つぎに思いつくことは、ロングカードについてです。はたして本当にジョーダンは 1 組の中に 14 枚ものロングカードを分散させたデッキを使用したのでしょうか。試しにノーマルデッキを使って、4 枚おきぐらいに何枚かのカードを 1mm ぐらい、他のカードより出っ張るようにし

て見てください。出っ張っているエンドはとてもではありませんが、異様に見えます。仕掛があるのが明白に見えるのです。

ではそのままの状態デッキを 180 度まわして、反対のエンドを見てみてください。そちら側にはショートカードが入っている状態と同等です。どうですか。ショートカードの方が、はるかに目立たないでしょう。なぜなら、ロングカードは出っ張っていますから、デッキをどの角度に保持しても、見えるのは当然です。ショートカードは、角度によってはまったく見えなくなります。

ついでですからもうひとつ、ロングカードとショートカードの機能の違いをしてしておきましょう。このジョーダン作品では必ずロングカードの下でカット / パスするので関係ありませんが、ロングカードとロングカードの間でカット / パスする必要がある場合、ロングカードとロングカードの間でカット / パスするのは不可能です。ショートカードなら、あるショートの上で分けたあと、必要枚数を親指でリフルして落とすことにより、目的を達成できます。

カット / パス必要カ所

つぎに私が考えたことは、13 カ所のどこからパスする必要があるのがたいへん過ぎるので、もっと少ないカ所に対応できないだろうかということです。自分で考え出して発見できたとしても、所詮、私はこの現象を実現したいとは思いませんので、そのような作品があるかどうか調べることにしました。

このようなことを調べるのに、グーグル検索は最強の武器です。ジョーダン作品の題名そのまま、'Spelling Any Card Called For' で検索したら、1780 万件もヒットしました。あまりに多くの関係ないサイトがでてしまうので、こんどは検索ワードに 'Trick' を付け足しました。それでも 230 万件のヒットです。

けっきょくカードマジックでこのキーワードで出てきたのは、500 のサイトでした。少なくともそれらはスペルトリックについて書いていて、かなり多くがスペルで指定されたカードを現すという、ジョーダン作品に何らかの関係のあるものを書いているようです。

それらの中から重要なものを 3 つピックアップして、ここで言及しておきましょう。

まず、1930 年に単独解説書として発売された、スチュワート・ジェイムスの 'エボリューションオブアドリーム' です。これが "スチュワート・ジェイムスファースト 50 イヤーズ" (1989 年刊) に出ているのがわかりました。同書を持っていたので、解説を読みました。

何とその方法では、カット / パスするのは 1 カ所だけでした。しかもその位置に表向きにジョーカーを入れておき、そこからカットする場合は、ジョーカーを取り除く動作で行っています。

ですからパスを使う必要はありません。

バリュースペル

しかしながらパスを使わない代償として、ジョーダン作品のようにフルスペルで演じることはできません。フルスペルとは、'XXXX OF XXXXXS' というように、中間に 'OF' と末尾に 'S' をつけてスペルすることです。ジェイムス作品では、最初にカードの数の分だけディールします。Aは1枚ディールし、Kは13枚ディールします。それからマークのスペルの分をディールすると、指定されたカードが現れます。

そのようなスペルの方法でよければ、「ジェイムス作品は使えそうだな」と感じたのですが、ところがどっこいです。いざ試してみようと、デッキのスタック方法を読み始めたところ、何とマーク別に集まっているのです。マーク別に集まっていようと、ニューデッキオーダーになっていようと、ディールが裏向きに行われるのなら、それも許容できます。

ところがです。ジェイムス作品では、50%の確率で表向きでディールする必要があるのです。同じマークのカードが連続しているのが丸見えになってしまいます。私は心の中で「ふざけるな！」と叫んでしまいました。

そんなトリックを作ることも、書き残すこともクリエイターとしては恥ずべきことではないでしょうか。もしかしたら私も似通ったことをやってきたかと思うと、ぞっとします。人の振り見て、我が振りを直すことにいたしましょう。

ミックスディール法

つねに裏向きでディールできるやり方で、カット / パスの必要カ所が少ないやり方がないかと調べたら、“エンサイクロペディアオブカードトリックス”(1938年刊)に出ているのがわかりました。これもグーグル検索のおかげです。私の脳みそがそんなことをおぼえているわけがありません。

そのバージョンのスタックは、マークべつに13枚が集まっています。したがって、それぞれのマークに対して1カ所でカット / パスしたあと、数に対して異なるスペルの仕方で対応します。あるものはフルスペルで、あるものはジェイムス式に数とマークのスペルで、あるものは 'OF' を抜いた数のスペルとマークのスペルで、という具合です。これがAからKまで一覧になっているのを見て、とても試す気が起こりませんでした。

しかしここにもまたジョーダンから出発して、ジェイムスの数の分をディールするというアイデア、そしてエンサイクロペディアに書かれている、ディールの方法をミックスするアイデアの開発と、まさにクリエイターたちの執念を感じることができました。

振り出しに戻る

そしてグーグルサーチの最終地点は、ぐるりめぐってジョーダン作品に戻ることになります。'Spelling Any Card Called For' で検索をかけたのですから、当然ながらジョーダン作品についてもリストアップされるわけです。その中に、カール・ファルブズ著の "チャールズ・ジョーダンズベストカードトリックス"(1992年)の名がありました。

そうです。ファルブズの同書を参照するのを忘れていました。早速同書を開くと、何とファルブズがすごいアイデアを書いているのです。スタックの仕方や、演じ方はジョーダンと同じですが、記憶に頼ってどこからカット / パスするかを決めるのではなく、カット / パスするカ所をメモした紙をカードケースに貼っておくというアイデアです。

目から鱗、青天の霹靂、驚天動地とはこのことです。このアイデアを読んで、やる気が起こらなかったジョーダン作品が、一気にやってみたいという気にさせられました。下図のようなメモをケースに貼っておいて、相手にカードを指定させてから、ケースからデッキを取り出すときに、カット / パスするカ所を知るのです。

1. ♠10-♥K-♥3	8. ♠A-♠4-♠7
2. ♥J-♦J	9. ♠2-♠5-♠8
3. ♣J-♠J	10. ♠6-♠9-♠Q
4. ♣A-♣4-♣7-♦A-♦4-♦7	11. ♠3-♠10-♠K
5. ♣2-♣5-♣8-♦2-♦5-♦8	12. ♥A-♥4-♥7
6. ♣6-♣9-♣Q-♦6-♦9-♦Q	13. ♥2-♥5-♥8
7. ♣10-♣K-♣3-♦10-♦K-♦3	

私のささやかなアイデアを加えさせていただきます。ささやかとは言っても、ファルブズのメモの書き方では、目的のカードを見つけるのにケースを2,3秒見ないと見つけれないという、致命的な問題があります。以下のようにカード別にカットする枚数目を書いておけば、見た瞬間に知ることができます。XX はカット / パスするべきロングカードの枚数目を書くのです。

ダ A-XX 2-XX 3-XX 4-XX 5-XX 6-XX 7-XX
8-XX 9-XX 0-XX J-XX Q-XX K-XX

ク A-XX 2-XX 3-XX 4-XX 5-XX 6-XX 7-XX
8-XX 9-XX 0-XX J-XX Q-XX K-XX

ハ A-XX 2-XX 3-XX 4-XX 5-XX 6-XX 7-XX
8-XX 9-XX 0-XX J-XX Q-XX K-XX

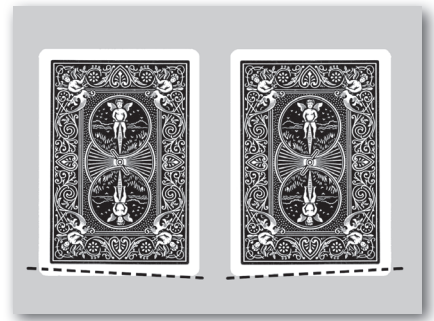
ス A-XX 2-XX 3-XX 4-XX 5-XX 6-XX 7-XX
8-XX 9-XX 0-XX J-XX Q-XX K-XX

私の執念

ファルブズのように、計算ではなく、メモを見ることによってカット / パスする位置を知るのであれば、「もっとランダムなスタックでできるはずだ！」と私は直感しました。ジョーダン作品では、同じマークのカードがかなり固まっているので、表向きにスプレッドすることはできません。そのような方法を見つけてやろうと、私の執念に炎がとりました。

このようなことを研究していると、本題から少し離れたアイデアを発見したり、思いつくことがあります。今回思いついた重要なアイデアは、ジョーダン作品のように 13 カ所のどこかでカット / パスしなければならない場合、1 組のデッキの中に 13 枚ものショートカードを分散させたら、目的の枚数目を見つけるのがたいへんです。

そこで思いついたのが、通常のエンドショートではなく、ストリッパータイプのショートカードを使用することです。奇数枚目には右図の左のように斜めにカットしたもの、偶数枚目には反対にカットしたものをセットすれば、目的カ所を見つけるのがはるかに速くできます。図は誇張されています。カット幅は 1mm 程度で十分です。



このアイデアは、何もジョーダンのスペルトリックにかぎらず、' エニイカードアットエニイナンバー ' などのように、特定カ所でカット / パスする必要があるトリックに応用できるはずです。「うん、これはスペルトリックに関してよりも、もっと価値のある発見だ！」ということで、ジョーダン作品から出発した今日の研究を締めくくりました。

29. カード & ナンバーミステリー

= The Card and Number Mystery =

* 現 象 *

封筒を客に渡します。シャフルしたデッキを客に渡し、後向きになります。客はデッキをそのまま使うか、トップから 1, 2 枚ボトムにまわしてから使うか選択します。そのあとデッキのトップからディーリングして、2 枚、3 枚、4 枚、5 枚、6 枚のパイルを作ります。客は任意のパイルを選び、その他のパイルをすべてデッキのボトムに戻します。客が選んだパイルのカードの数をすべて加算して、その答の数だけトップからディーリングすると、最後のカードと、封筒に入っている予言とが一致します。

* 準 備 *

トップからつぎのようにセットします。KD QS QD JC 2D JS 10C AH 3H 10S 9C 2C 3S AS 9D 8H 3C 2S 2H AC 8S 7H、適当なカード 22 枚、フォースカード、そして残りの 7 枚。トップから 45 枚目のフォースカードの名前を予言として紙片に書いて、封筒に入れておきます。

* 方 法 *

シャフルはフォールスシャフルです。そのあと客にトップから 1 枚もしくは 2 枚まわしても、1 枚もまわさなくてもよいと指示します。いずれにしても、最初のセットにおけるトップから 45 枚目にあるカードがフォースされます。現象説明の通りに進めてください。

30. ラストトリック

= Last Trick =

‘トリオ’を最初に解説した当時は、バイシクルの青いライダーバックでは、必ず 3 枚のカードがリバーズされていましたが、最近では、中にはそのようにならないものもあります。そこでそのようなデッキを使って、同じ現象を演じるやり方を説明いたします。

新しいデッキからハートの 2、ダイヤの 10、クラブの K を抜いて、ポケットに入れておきます。新しいデッキを開けて、客にカードを数えさせますが、そのとき 3 枚が逆向きになっているかどうかチェックします。逆向きになっていれば、まえに説明した通りに行います。

逆向きのカードがない場合は、客にカードをシャフルさせて、3 枚のカードを抜いてテーブルに置かせますが、そのときポケットから密かに 3 枚をパームして取ってきます。

客に 3 枚のカードを抜いてテーブルに置かせてから、パームしている 3 枚を密かにトップに加えます。そのあと原案と同じやり方に続けます。

今日の発見

= 第 7 回 =

No.021 スペルアジャスト法

投稿日：2007 年 10 月 21 日

“エンサイクロペディアオブカードトリックス”(1937 年)に書かれている、ローレンス・グレイの 'Spelling a Card' は、もとは 1923 年に発行された "Elliot Last Legacy" に書かれたものであり、私の知るかぎり、選ばれたカードのスペル数に合わせて選ばれたカードをコントロールするという概念の、もっとも古いスペルトリックです。

その原理はたいへん原始的なものです、雑誌 "リンクングリング" 1927 年 1 月号のジョー・オベットの 'New Spelling Card Trick' や、雑誌 "ヒューガードマジックマンスリー" 1944 年 8 月号のヘラーの 'The Heller Speller'、そして 1997 年発行の 'ジェニングス '67' にさえ、その原理が使われたラリー・ジェニングスの 'インスタントスペル' が書かれています。

相手にカードをたずねてから、カードを操作しなくてはならないというのが、それらに共通する弱点だと感じました。操作するにしても、それが怪しさを生まないものにするには、その操作が現象を見せるプロセスに埋没されていればよいと考えて、つぎのようなバージョンを考案いたしました。

わたしのカード・あなたのカード

= 加藤英夫、2007 年 10 月 21 日 =

ボトムから QD, 4D, 3S, 7C, AH, 6C とセットします。QD がボトムカードです。そしてボトムから 7 枚目のカードをクリンプしておきます。

ボトムの 7 枚をくずさないようにデッキをシャフルします。

それから、相手にやってもらうことを説明します。「このようにカードを置いていってください」と言って、ディールして、6 枚置いたらストップします。「そして好きなところでストップしてください」と言います。「もっと置いてもいいですよ」とセリフを続けながら、あと 3 枚ディー

ルします。最後にディールしたカードを持ち上げてのぞく振りをして、「最後に置いたカードをのぞいておぼえてください」と言います。「そうしたら、残りのカードをこのように上に重ねてください」と言って、残りのカードをディールしたカードの上に重ねます。

デッキを取り上げて相手に渡し、後向きになります。相手が操作を完了したら、前に向き直ります。

「私もカードを選びます」と言って、9枚のカードをディールして、最後のカードをのぞく真似をします。おぼえる必要ありません。そのカードをテーブルのカードの上に戻すとき、右へ少しずらして置きます。

残りのカードをテーブルのカードの上に重ね、取り上げてそろえるとき、右にずらしたカードの上にブレイクを作ります。

クリンプカードの上でカットして、持ち上げたパケットをテーブルに置きます。つぎのブレイクからカットして、テーブル上のパケットの上に重ねます。そして残りのカードをそれらの上に重ねます。

シチュエーションチェック：

トップより9枚の関係ないカード、6枚のセットカード、9枚の関係ないカード、そしてそのつぎに相手が選んだカードとなっています。

「あなたのカードのスペルに合わせてカードを置いていくと、あなたのカードが現れます。あなたのカードは何でしたか」とたずねます。そうしたら、「私のカードは〇〇の××でした」と、あなたのカードとして、以下のルールにしたがって告げます。

相手がX文字のカードを言ったら、あなたはセットした6枚のうちの(25-X)文字のカードを告げるのです。

No.022 アンビシャスフリーズ

投稿日：2007 年 10 月 28 日

今日は、“New Era Card Tricks”に解説されている、‘エクセルシオールチェンジ’を応用した、‘アンビシャスカード’の 1 フリーズを思いつきました。

2 枚のカードを右手に持ち、右手を返して表を見せます。デッキはテーブル正面にあります。右手を左に返して 2 枚を左手に渡しますが、エクセルシオールチェンジの最初の動作を行って、下のカードを右にずらします。ですが、ずらしたカードはパームしません。

左手は上のカードだけをつかみ、右手はシークレットトランスファーの要領で、下のカードをデッキの上に運び、右手はデッキをつかんでまん中あたりからカットします。そして左手の 1 枚を下半分の上に置き、その上に右手の下半分を重ねます。

魔法をかけてから、トップからアンビシャスカードを現します。

補 足

‘エクセルシオールチェンジ’は、“Card Magic Library”第 1 巻、10 ページに解説されています。

このフリーズを行うまえのフリーズとしては、‘ティルト’で中央に入れたとして見せて、ダブルターンオーバーで現す、というやり方などが考えられます。その場合は、つぎのように演ずるとよいでしょう。

ダブルターンオーバーで表を見せて、ダブルを裏向きに戻したとき、2 枚の下にブレイクを作り、ブレイクを右親指で継承して、デッキをテーブルに置きます。そのまま右手はブレイク上の 2 枚を取り上げます。

そして前述のように行い、右手でカットして 1 枚を下半分にのせたら、右手の上半分を下半分の上にドリブルオフしてのせます。

それからカードをそろえ、魔法をかけたあと、トップからアンビシャスカードを現します。

No.023 ミニチュアカードブリディクション

投稿日：2007 年 10 月 29 日

雑誌“ジニー”、1960 年 9 月号に、アルディーニが‘Compared’というトリックを書いています。そのトリックでは、ノーマルデッキ 1 組とミニチュアデッキ 1 組とを使っています。私はその組合わせにヒントを得て、以下のトリックを思いつきました。現象と方法はアルディーニ作品とは関係ありません。

1 枚のノーマルカードの中央に、ミニチュアカードがおさまるような穴を切り抜きます。ミニチュアカードをおさめたときに、きつくならないように、少しゆるくなるような大きさにします。そして穴を開けたカードの表に、別のノーマルカードを貼ります。そのようなギミックカードを 26 枚作ります。

表はマークも数も適当に混ざったものとします。そしてミニチュアを各ギミックカードのバックにはめますが、それらを重ねたときに、表向きでいちばん上にあるギミックカードにはまっているミニチュアカードは、フェースから 2 枚目のノーマルカードと同じものにします。すなわち、フェースから 2 枚目のノーマル面がダイヤの 8 だとしたら、その手前のギミックカードにはまてっているミニチュアカードがダイヤの 8 であるということです。

すべてのミニチュアカードを、それよりも上のギミックカードのノーマル面と同じ物とします。

デッキを表向きに両手の間に広げますが、ミニチュアカードを落とさないようにします。そして相手に好きな 1 枚を指ささせ、そのカードがフェースになるようにカットします。

そうすると、選ばれたカードと同じミニチュアカードがバックにきますから、ゆるめれば自動的に左手に落ちてきます。

そのミニチュアカードをパームしながら、デッキを表向きにテーブルに置きます。そしてパームしているミニチュアカードを、ケースとか封筒などから現して、選ばれたカードと一致しているのを見せます。

?????????????????????????????????????
?
?
?
?
?????????????????????????????????????
それでもいいのかな?
第5回 司会者の突っ込み

“Video Lesson”用にダウンロードしていただいた映像 006 を見てください。この演技を見て、マジックカフェであるメンバーがつぎのように言いました。

このマジシャンは司会者の突っ込みによく耐えていましたね。

この一言を読んだかのダーウィン・オルティズが、つぎのように意見を投稿してきました。

あのマジシャンが司会者の突っ込み耐えていた、という意見には違和感をおぼえます。私がマジックを見ていただちを感じるのは、客の気分を害するマジシャンを見たときです。この演技では、マジシャンがうまく演じていないことに司会者が正当に反応したのに、それをとがめられているような感じがします。

テレビ番組の司会者というものは、つねに面白いことを引き出そうとします。そうでなければチャンネルを替えられてしまうからです。ですからこのマジシャンの退屈な演技に対して、司会者は突っ込みを入れているのではなく、演技がまともになるようにリードしているのです。

ディールの途中で、表向きのカードでストップをかけるのか、それとも裏向きのカードでストップをかけるのか、ということを司会者が問いかけますが、そんなことは最初からはっきり説明しておかなければいけません。

表向きにした中にダイヤの2があったかと、マジシャンが問いかけますが、それもディールを始めるまえに、ダイヤの2が出るかどうか気にしておくように言うておくべきことです。

そもそもこのような‘オープンプリディクション’においては、予言のカードがストップがかかるまでに出てこないことを、観客すべてが目撃することが、サスペンスを生み出す重要ポイントなのです。

ところで彼はなぜ最初にデッキを表向きにリボンスプレッドしたのでしょうか。そのあと表向きにディールするので、カードが混ざっているのを見せる意味ありませんし、ストップしたところのカードが予言と一致するという現象ですから、最初に表を見せてはいけません。

ということで、オルティズの意見はたいへん参考になります。私は英会話がそれほど得意ではありませんから、オルティズが感じたようなマジシャンの演技のまずさはあまり感じませんでした。それよりも何よりも、テレビ番組でこの程度のマジックを演じたことそのものに首をかし

げました。相手が選んだカードを逆向きにデッキの中に入れて、それからまたデッキを広げてそれを見せるなどというのは、それだけで優れたマジックだとは思えません。

一体全体、最初に予言を見せておく’オープンブリディクション’というものは、マジックとして存在価値があるのでしょうか。私はこの演技を見て、そのことをいちばん強く感じました。

そしてこの映像を今回確認したのが、チャールズ・ジョーダンの”スプリングエニイカードワールドフォー”を取り上げたのと同時期であったことが幸いいたしました。両方について考察したために、つぎのような現象を思いついたのです。

マジシャンは1つの封筒を見せて、古代から伝わる魔法の言葉が書かれた紙が入っていると言って、テーブルに置きます。それから1人目の客に52枚から好きなカードを指定させます。ケースからデッキを出して1人目の客に渡します。封筒から紙片を取り出して、書かれている魔法の言葉を2人目の客にゆっくり読み上げさせ、1人目の客にそれに合わせてカードをディールさせます。すると最後に、1人目の客が指定したカードが現れます。

以上の現象が実現できることは確信していますが、まだ必要なスタック構造を構築していませんので、全体がまとまったら発表したいと思います。

加藤英夫のホームページ

<http://www.magicplaza.gn.to/>

Card Magic Magazine 第 9 号

発 行 2013 年 1 月 6 日

著 者 加藤英夫

発行者 加藤英夫

hae16220@ams.odn.ne.jp

